

[色彩豊かな森林空間づくり（シカ被害による裸山復旧技術の開発）]

2004年から2006年にかけてのシカ生息密度分布の変化

新井一司
(都市環境科)

【要 約】 糞粒法を用い、2004年から2006年にかけてのシカ生息密度分布の変化を明らかにした。これまで高密度だった川乗山や鋸山周辺では、2006年に低密度に推移したが、埼玉県や山梨県との県境である西谷山周辺や奥多摩湖の北側では、高密度であった。

【目 的】

奥多摩町やその周辺の地域では、ニホンジカ（以下、シカと略す）による森林被害が生じており、2004年には、裸地化が進行し、大量の土砂が流出するという甚大な被害地がみられるようになった。都は、2005年に東京都シカ保護管理計画を策定し、今後、生息数を管理しつつ、シカとの共存を目指すとしている。この共存を達成するには、シカがどの地域に高密度に分布するのか、その実態を把握しておくことは、極めて重要である。そこで、糞粒法を用いてシカ生息密度分布図を作成し、2年間の変化を明らかにした。

【方 法】

対象地域は、図1に示した東京都西部の奥多摩町と檜原村の全域、青梅市西部、あきる野市と日の出町の一部である。現地調査は、森林課、森林事務所などの協力により上層がうっ閉したスギ人工林などの林内環境において35カ所、造林未済地のような上層木がほとんどない明るい林地の林外環境において24カ所、合計59カ所について2006年10月に行った。1カ所の調査は、約1ha内を5m間隔で1m²内の糞粒数を数え、これを240地点行い、平均糞密度とした。得られた糞密度から東京版シカ個体密度計算プログラム(ver.0411)を用いて生息頭数を算出し、1キロメッシュ区分の分布図を作成した。

【成果の概要】

- 1) 2004年と2005年に10頭/km²以上という高密度のメッシュが多くみられた川乗山や鋸山周辺では、2006年には、図2に示したように2～10頭/km²と低密度になった。一方、埼玉県との県境である西谷山周辺や山梨県との境である奥多摩湖の北側の地域では、高密度であった。
- 2) 林内環境における生息密度の平均値は、表1に示したように2004年から2006年にかけて減少傾向がみられたが、林外環境では、ほとんど変化がみられなかった。
- 3) 以上の結果から、低密度となった川乗山周辺の地域では、集中的な捕獲の効果が現れたものと考えられる。一方、高密度となった地域は、いずれも都県境付近であることから、シカを都内で大量に捕獲しても、その後、管理捕獲を行っていない周辺の県からシカが移動してくることが推定され、今後、近県との調整が必須である。

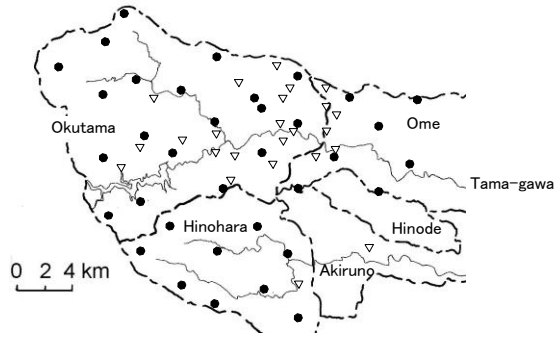


図1 調査位置図 (2006年)

●は林内環境
▽はスギ伐採跡地などの林外環境

表1 林外と林内におけるシカ生息密度の変化

環境	年	生息密度 (頭/km ²)		地点数
		平均値	最大値	
林内	2004年	3.8	31.4	34
	2005年	3.5	16.3	33
	2006年	3.1	18.4	35
林外	2004年	30.0	165.1	24
	2005年	30.4	122.6	25
	2006年	29.1	151.5	24

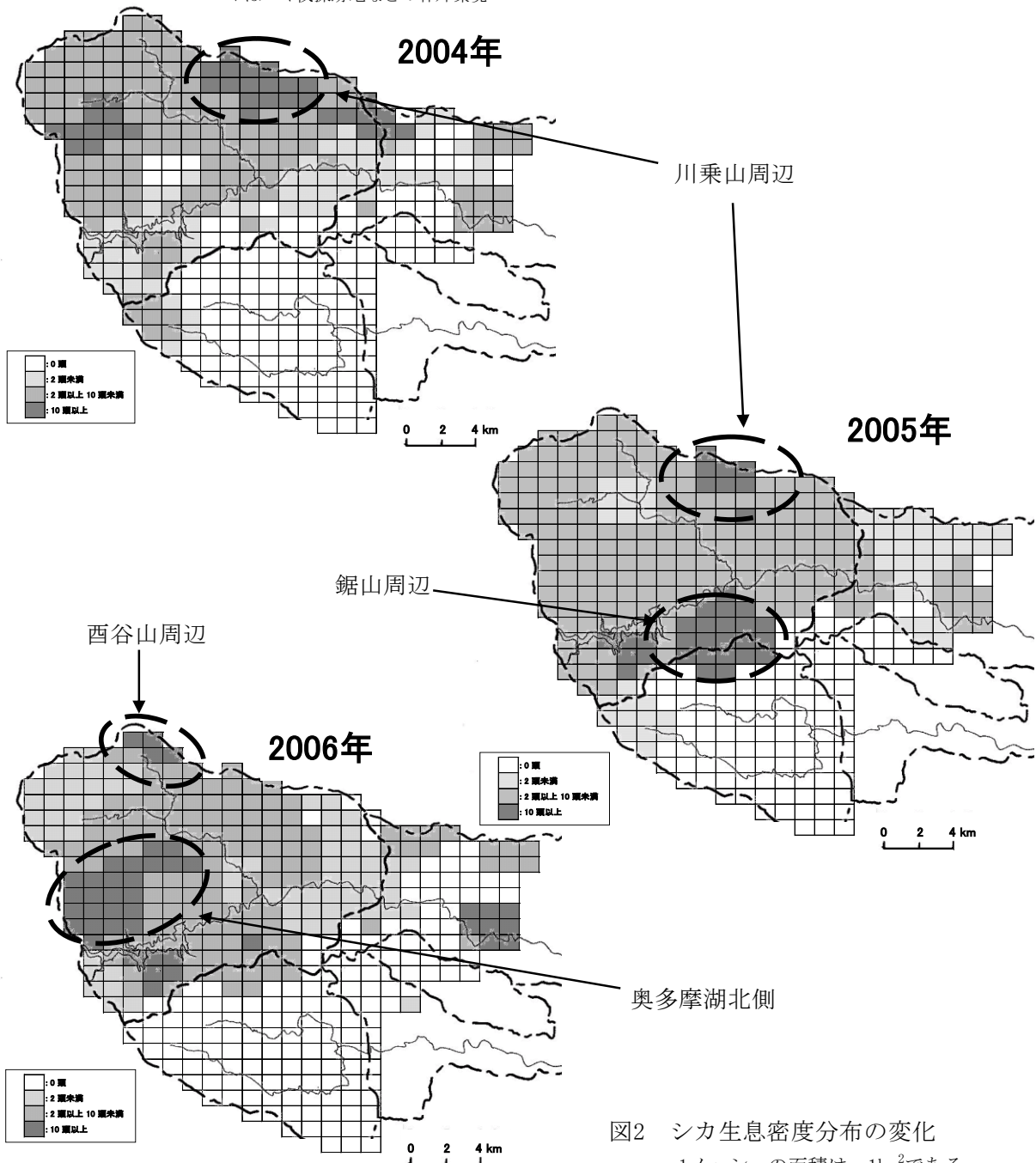


図2 シカ生息密度分布の変化

1メッシュの面積は、1km²である。